

SHOW HEY シネマルーム

Data

監督：アンジェロ・ロンゴーニ
撮影監督：ヴィットリオ・ストラーロ
出演：アレッシオ・ポーニ/エレナ・ソフィア・リッチ/ジョルディ・モリャ/パオロ・ブリグリア/ベンジャミン・サドラー/クレール・ケーム/サラ・フェルバーバウム/マウリッツィオ・ドナドーニ/フランソワ・モンタギュー/ルベン・リジッロ

カラヴァッジョ 天才画家の光と影

2007年・イタリア、フランス、スペイン、ドイツ合作映画
配給/東京テアトル
133分

2010(平成22)年1月29日鑑賞

角川映画試写室

👁️👁️ みどころ

レンブラント、ベラスケス、フェルメールなどと並ぶ、バロック絵画の巨匠をはじめて認識！その特徴は第1に写実性、第2に光と影のあざやかさだが、なぜ今までこんな巨匠を知らなかったの？それは、彼が一方で無頼の徒だったから？

西暦1600年前後のわずか38年の人生は、スペイン派とフランス派が対立する教会の上に成り立ったものだが、問題は彼のDNA。もっとも、そんな激しいDNAのおかげで擁護派と敵対勢力の対立は鮮明になったし、彼を取り巻く女性たちも数多い。そうなると、悲惨な最期ながら、好き放題に生きた後悔のない人生だったのかも・・・。

なぜ、今まで知らなかったの？

イタリア・ルネサンスの三大巨匠が、レオナルド・ダ・ヴィンチ(1452~1519年)、ミケランジェロ(1475~1564年)、ラファエロ(1483~1520年)の3人だということは、誰でも知っているはず。また、ルネサンス時代の絵画に特に造詣が深くなくとも、スペインのベラスケス(1599~1660年)やオランダのレンブラント(1606~1669年)の名前は知っているはず。また、レンブラントと並ぶオランダの画家フェルメール(1632~1675年)も聞いたことがあるはず。映画でも、レンブラントは『レンブラントの夜警』(07年)(『シネマルーム18』300頁参照)で、フェルメールは『真珠の耳飾りの少女』(02年)(『シネマルーム4』270頁参照)で取り上げられている。しかし、ベラスケスやレンブラントと同じ16~17世紀を生き

たイタリアのカラヴァッジョ（1571～1610年）をあなたは知っている？寡聞にして私は全然知らなかったが、本作をみてまずその破天荒な生きざまにビックリ。日本にも「最後の無頼派」作家と呼ばれた檀一雄（1912～1976年）のような作家がいたが、16～17世紀のイタリア・ルネサンスの時代にカラヴァッジョのような無頼画家がいたとは！こんな有名な画家をなぜ、今まで知らなかったの？

光と影とは？写実主義とは？

本作はカラヴァッジョの個展のようにストーリー展開の中でたくさんの作品を紹介してくれるが、カラヴァッジョの絵画の第1の特徴は光の使い方。邦題のサブタイトルとしてわざわざ『天才画家の光と影』を付したのは、彼の生きざまだけではなく、絵そのものに注目したものだ。つまり、光の使い方と影の使い方の濃淡がカラヴァッジョ絵画の第1の特徴だ。

第2の特徴は写実性。カラヴァッジョは下書きはしないが、必ずモデルを使って描いたらしい。プレスシートにある宮下規久朗氏の解説「カラヴァッジョという画家 映画『カラヴァッジョ 天才画家の光と影』に寄せて」によると、

「カラヴァッジョは、かつてのイタリアの紙幣でもっとも高額な十万リラ札の顔になっていた。遺された作品はそれほど多くはなく、せいぜい60点ほどだが、それが美術館や教会ではどこでも黒山の人だかりが絶えることがない。しかし、その人気はずっと続いてきたものではなく、20世紀後半からであり、近年になってますます高まっているのだ。カラヴァッジョは生前もイタリアでもっとも有名な画家であったが、没後急速にその評価が下がり、19世紀までのアカデミズムの中では、絵画を理想から現実に引きずり降ろし、悪い方向に導いた張本人として批難された。19世紀中葉にフランスで写実主義が起こり、また既存のアカデミズムに反発する前衛主義が生まれると、カラヴァッジョは、史上はじめて画壇や教会の権威に反抗して革新をなしたけた絵画の革命児としてクローズアップされる。20世紀にはイタリア最大の画家と目され、とくに20世紀後半には多くの展覧会が開かれて人気上昇し、今や世界中でもっとも人気のある巨匠になったのである」と紹介されている。

カラヴァッジョが作品を描くについて、いかに光にこだわっていたかは映画の中でも十分に描かれているうえ、彼がモデルを見つめる目を見ていると写実主義への執念が顕著。そんな風に考えると、カラヴァッジョの写実主義は、2009年NHKスペシャルドラマ『坂の上の雲』で有名になった、俳句の正岡子規の「写実主義」にも通じるもの？

カラヴァッジョの生きた時代は？教会は？政治は？

芸術家はその生きた時代によって大きな制約を受けるのは当然だが、カラヴァッジョが生きた時代は？また、その時代における教会（教皇）は？そして政治は？「政権交代」が

実現した2010年のニッポン国では、1月29日の所信表明演説で鳩山総理は約50分にわたって「いのちを守る」をキーワードとした異例の理念型所信表明を行ったが、カラヴァッジョが生きた西暦1600年前後におけるイタリアの政治状況は？

コロンブスがスペインのイザベラ女王の支援を得て艦隊を出航させ、1492年に新大陸を発見したことや、1588年にイギリスがスペインの無敵艦隊をやっつけたことなどから推測すれば、16世紀はスペインの時代。また、中世は国王よりも教会（教皇）が権勢を誇っていた時代。その程度の大雑把な知識を持って本作を観ていると、イタリアでは教皇の選出をめぐるスペイン派とフランス派の対立があったことがよくわかる。また、面白いのは「十字軍」で有名な西洋史特有の「騎士団」が登場すること。私は中学2年生の頃に観たチャールトン・ヘストンとソフィア・ローレンが共演した『エル・シド』（61年）をよく覚えているが、中世までずっと騎士が存続し、その名誉が続いていることが、本作のマルタ騎士団長アロフ・ドゥ・ヴィニャクール（フランソワ・モンタギュー）などを見るとよくわかる。

本作を理解するためには、そんな背景事情の勉強も大切だ。

カラヴァッジョのパトロンは？敵対勢力は？

大阪の風雲児として、橋下徹大阪府知事の八面六臂の活躍が顕著だが、財政再建の一施策として打ち出した交響楽団への補助金打ち切りなどの政策は評判が悪い。しかし、カネがすべてに優先する近代の民主主義社会では所詮文化や芸術の生き残りが難しいのが宿命？

それに対して、中世の貴族社会では権力とカネのあるパトロンと出会いその保護さえ受けられれば、音楽家や画家などの芸術家は重宝され好きなように生きることができたから楽ちゃん？どこまでもカラヴァッジョのために貢献してくれるミラノのコスタンツァ・コロナ侯爵夫人（エレナ・ソフィア・リッチ）や、無頼の限りを尽くすカラヴァッジョをいさめながらも一貫してその才能を認め応援してくれる最大のパトロン、デル・モンテ枢機卿（ジョルディ・モリヤ）の姿を見ていると、そう痛感する。ここまで応援してくれるパトロンがいるのだから、「その顔を潰すようなことをするなよ」とつくづく思うのだが、フーテンの真さんがその生きザマを変えることができなかったように、カラヴァッジョの無頼は修正不能？

その結果、最も古い知り合いであるマリオ・ミニエーティ（パオロ・ブリグリア）や、ケンカと遊びにいつも同行する同郷人のオノリオ・ロンギ（ベンジャミン・サドラー）などの味方はいるものの、カラヴァッジョの周りにはどの時点でも、どの地点でも敵対勢力がウヨウヨ。高級娼婦フィリデ・メランドローニ（クレール・ケーム）をめぐる、彼女の元締めたる街の権力者ラヌッチョ・トマッソーニ（マウリッツィオ・ドナドーニ）との対立は、「私VS私」の闘いだが、教会内でスペイン派の勢力が強くなり、フランス派のデル・

モンテ枢機卿の力が衰退していくと、デル・モンテ枢機卿の寄って立つ基盤は？本作におけるカラヴァッジョの生涯とその作品の価値を理解するには、そんなカラヴァッジョのパトロンたちと敵対勢力との相関関係を理解することが不可欠だ。

日本の戦国時代における大名たちの攻防戦や、幕末から明治維新にかけての志士たちの攻防戦は日本人にはお馴染みだが、中世ヨーロッパとりわけイタリアにおける教会画家をめぐる攻防戦には全く馴染みがないから、その理解は難しい。次々と登場してくる人物たちの立場とカラヴァッジョへのスタンスをきちんと整理しながら、理解しなければ。



(C)2007 RAI FICTION - TITANIA PRODUZIONI - INSTITUT DEL CINEMA
CATALA'- EOS ENTERTAINMENT - GTM PRODUCTIONS

カラヴァッジョを取り巻く女たちは？彼の行く末は？

坂本龍馬を取り巻く女たちは、日本ではじめて新婚旅行に行ったと言われているお龍さんをはじめ、土佐の幼なじみである平井加尾や、千葉周作道場で知り合った超一流の女流剣士千葉佐那など多彩だが、彼女たちの共通点は勝気で行動的な女だということ。それは、龍馬が幼い時から4歳年上の姉乙女から鍛えられたことの影響だと言われているが、さて稀代の無頼の画家カラヴァッジョを取り巻く女たちは？

芸術家が女にもてることは去る1月18日に観た『人間失格』（10年）の大庭葉蔵を見ても明らかだが、本作におけるカラヴァッジョの女に対する尽くし方を見ていると、女がカラヴァッジョにホれるのは当然だと納得できる。カラヴァッジョは敵対する男に対してはトコトン激情的で好戦型だが、こと女に対してはトコトンやさしく自己犠牲もいとわれないから、そんな男に女がホれるのは当然。カラヴァッジョが最初に目を奪われるとともに、女の方もカラヴァッジョに目を奪われたのが高級娼婦フィリデ。フィリデはデル・モンテ枢機卿が描く絵のモデルとしても重宝され、仲睦まじい時代もあったが、結局娼婦業を理

解できないカラヴァッジョはフィリデと決裂することに。他方、ミラノ時代からカラヴァッジョを応援してくれた侯爵夫人のコスタンツァは雲の上の存在だが、ある日街で出会ったのが街の娘レナ（サラ・フェルバーバウム）。暴漢に襲われているレナを助けるカラヴァッジョ、殺傷沙汰に巻き込まれそうになるレナを逃がしてやり、自らは警官隊に逮捕されるカラヴァッジョ。そんな姿はメチャカッコい。したがって、やっと釈放されたカラヴァッジョをレナが迎えに来たのは当然だが、ここから芽生えた愛の行方は？私的には、このすばらしい愛の姿をもう少し克明に描いてほしかったが、さてその愛は長く続くの？

それはカラヴァッジョの生きざマ次第だが、あの日くだらないケンカでラヌッチョを刺し殺してしまい、殺人犯の烙印を押されてしまったカラヴァッジョには、今後安穩な日々は期待できないのでは？薩長連合を成立させた坂本龍馬は、着々と新政府樹立のための構想を実現させようと奔走する中で暗殺されてしまったが、一方では著名画家としてすばらしい絵画を次々と描きながら、他方では指名手配中の殺人犯として逃亡生活を続けているカラヴァッジョの行く末は？

「死の影」は、黒いマントの男と黒い馬

本作は小船の中で「死の影」に怯えながら横たわる、衰弱しきったカラヴァッジョの回想シーンからスタートする。そして、この小船の中のシーンはストーリーの節目ごとに再三登場する。この船は、カラヴァッジョの庇護者たちの懸命の努力によってやっと手に入れ、恩赦決定を受けたカラヴァッジョをローマに帰すためのものだが、ここまで衰弱してしまっただけでこの先どうなるの？

死に神のイメージは古今東西いろいろだが、中世ヨーロッパのそれは、黒いマントを着た男が黒い馬にまたがって駆けつけてくるもの？ちなみに『アマデウス』（84年）では、衰弱しきったモーツァルトに『レクイエム』の作曲を依頼した「死に神」は、黒いマントと黒い仮面の男サリエリだったが、本作における黒い馬にまたがった黒いマントの男は一体誰？これはすべてカラヴァッジョの幻想？ちなみに、馬も人間に従順に尽くしている時はいとおいしいものだが、大きく口を開けていかにもキバをむけて突進してくるかの如き姿になると、そりゃ恐ろしい。死刑宣告を受けて、ローマからナポリへ、そしてマルタへと逃亡生活を続けていたカラヴァッジョは今やっと恩赦の朗報を聞くことができたが、カラヴァッジョとこの死に神の闘いの結末は？

いつも剣を手放さず、ちょっと挑発されるとすぐにケンカしてしまう血気盛んなカラヴァッジョの姿をみていると、「無頼」という形容がピッタリだが、なぜこんな天才画家がそんなDNAを持ち合わせたのだろうか？そのあまりに好戦的で激情的な性格が命取りとなり、こんな天才画家がわずか38歳で死亡してしまったことを考えると、つくづくそんなDNAをうらめしく思ってしまう。そんな彼の光の部分に大きな拍手を送るとともに、影の部分に合掌。

2010（平成22）年2月1日記